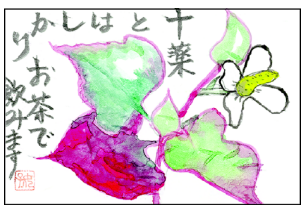
新婦人しんぶん

新日本婦人の会目的

☆核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもります。
☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。
☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせます。
☆日本の独立と民主主義、女性の解放をかちとります。
☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてます。

今週の紙面

■2面　ニュース　■3面　読者のページ／まんが／スケルトンパズル　■4・5面　自衛隊体験に待った！／女性＆メディア／それって？／ホットライン　■6面　自然とあそぼう！／文化情報　■7面　新婦人災害支援で輪島へ／主張／母の歴史



静岡・伊東市　大川好子（74）

新日本婦人の会は国連に認証されたＮＧＯです

平和を問う演劇の力

秋田雨雀・土方与志 記念　**青年劇場創立60年**

どうしたら戦争を終わらせることができるのか

常に社会の状況と向き合い、時代と切り結ぶ作品を送り出してきた青年劇場が今年、創立60周年を迎えます。記念公演第三弾は、9月13日から始まる「失敗の研究―ノモンハン1939」です。作品に込めた思いを、主役を務める岡本有紀さんと製作の福島明夫さんに聞きました。

時代の分岐点

哲学者を主人公に弾圧との闘いを描いた「眞理の勇氣―戸坂潤と唯物論研究会」（22年）に続き、古川健さん（劇団チョコレートケーキ）の脚本、鵜山仁さん（劇団文学座）の演出で、昭和史に挑む意欲作です。作品作りは「戦争はどうしたら止められるのか」という問いからスタートし、70年代にノモンハン事件（※）を追う編集者を主人公にした物語となっています。

「1970年前後というのは時代の分岐点なんです」と話すのは製作の福島明夫さん。1960年の安保闘争以降、日本は高度成長を成し遂げ、東京オリンピック、大阪万博などの大型イベントや新幹線開通、高速道路網が整備されていきました。一方で公害が社会的問題となり、市民運動が高まって東京、大阪等で革新自治体を誕生させたのも70年前後です。

「ウーマンリブが出てきたのも70年初め。ベトナム戦争（1955～1975年）で、日本の米軍基地から直接出撃していたこともあり、反戦歌が生まれ、反戦運動が高まった。あの時代はよく一部の学生運動が過激化したことばかりが話題になりますが、反戦の歌や映画が日常生活にあふれて、政治に関心のない人でも戦争に向き合っていた。あの世代が今の平和を支えているという思いもあります」と福島さん。日本軍「慰安婦」問題や旧日本軍の細菌戦部隊「731部隊」の告発など、戦争の加害の実態究明が始まったのも70年代です。

※ノモンハン事件とは
1939年5月、「満州国」とモンゴルの国境付近のノモンハンで、国境線をめぐって日本軍とソ連軍の間で起きた軍事衝突。同年9月に停戦交渉が成立するまでの激しい戦闘で、両軍ともに約2万人の死傷者を出し「事件」と言うより実質的には「戦争」であった。日本陸軍が初めて経験した本格的な近代戦であり、圧倒的な物量と最新兵器を備えたソ連軍に対して、物量も装備も劣る日本軍は〝大和魂で補う〟ことしかできなかった。

いま自分ができる最大のこと

主人公の女性編集者・沢田利枝を演じる岡本有紀さんは、日本軍「慰安婦」問題を扱った「鮮やかな朝」（21年）では元「慰安婦」の娘役、米軍軍政下の石垣島の人々を描いた「豚と真珠湾―幻の八重山共和国」（22年）では二人の娘を育てる海人（うみんちゅ）の母親役など、役の幅をひろげてきました。

「今回の役は『今、大事な仕事をしている。この仕事に大きな意味があるって信じてる』というセリフがあるんです。私は劇団に入って18年目、初めての主役です。いま自分ができる最大のことは何か。それは舞台の上で戦争についてみなさんが考えを共有できるよう問いかけること。その思いが強くなっています」。

70年代、まだ働く女性が少ない中で初めての女性編集者として期待され、「女性ならではの記事を書いてよ」と言われる主人公。ノモンハン事件について詳しく知らず、取材することで「こんな事実がある」と知っていきます。「男性は『男性ならではの視点』を求められないのに、女性には求められる。沢田利枝は『女性ならではとは？』との疑問をずっと持ち続けていて。最終的には、私ならではの視点に気づいていくんです。自分の視点でノモンハン事件を書きたいと。その視点が、どうしたら戦争を止めることができるのか、に行き着く」と岡本さん。

〈2面へ〉

主人公・沢田利枝を演じる岡本有紀さん（青年劇場スタジオ結にて）

公演チラシ

あらすじ

1970年のとある出版社。まだ女性編集者の少ない職場で将来を期待された沢田利枝（岡本有紀）は、次年度に向けた長期連載企画として「ノモンハン事件」を提案する。編集部からは「過去の事件よりも今のベトナムだろう」と反対されるものの、大物小説家・馬場（吉村直）の発案であることを伝えると反応は一転。無事に企画を進めることになった沢田は、先輩の後藤（矢野貴大）とともに当時を知る証言者たちへ取材を重ねていく。「どうしてこの戦争を止めることができなかったのか」。沢田の疑問は膨らんでいくが、突然馬場が執筆を断念すると言い出す。到底あきらめきれないと訴える沢田に対し、後藤は一策を講じる…。

8月17日号は休刊です

発行所　新日本婦人の会　New Japan Women's Association　〒112―0002 東京都文京区小石川5-10-20　電話03（3814）9141（代）　編集部 03（5805）2370／ Fax 03（5805）2372　振替00150-7-74582　1部105円　月410円（いずれも税込み、送料別）、会員は会費に含む
http://www.shinfujin.gr.jp ©新日本婦人の会2024年